

## 解 答

放送問題につき、省略。

問一 工 問二 イ

問三 香澄先生が教室から職員室にもどったということ。

問四 ウ 問五 イ 問六 工 問七 ウ 問八 イ

問九 A 興奮 B 宙

三 問一 A オ B イ

問二 工 問三 ア 問四 イ 問五 ウ 問六 ウ 問七 ア

## 解 説

出典は森浩美『夏を拾いに』。

問一 「 I して、しりをイスからうかせた」とあるので、落ち着かないようすを表す「そわそわ」が入ります。「 II と下校を始めた生徒たちの姿が現れる」には、人が続く様子を表す「ぞろぞろ」が入ります。

問二 直後に「池の周りくらいには“観客”をいっぱいにしてやりたい。それがせめてもの雄ちゃんに対する気持ちだ」とあるので、雄ちゃんの池跳びを盛り上げるための見物客としての意味があるといえます。

問三 「香澄先生が職員室にもどるのを確認」する役のつーやんがOKの合図をしたのだから、第一段階とは、香澄先生が教室から職員室にもどったことを意味します。

問四 「見たり聞いたりしながら、興奮したり緊張したりする」ことを「手に汗をにぎる」といいます。いよいよ雄ちゃんが池跳びをするので、絶対に成功してほしいと願い、緊張しているのです。

問五 何かに気をとられてまわりの音が聞こえなくなる、という表現は、物語ではしばしば使われます。池に向かって踏み切った雄ちゃんに気持ちが集中していたため、まわりの音が聞こえなくなったのです。

問七 「僕はそんな香澄先生の表情を間近で見られて、なぜかうれしくなった」とあるので、「そんな香澄先生の表情」とは何を指すのかを考えます。香澄先生は白いシャツが泥で汚れることを気にして雄ちゃんにのばしかけた手を止め、その後、観念したように、雄ちゃんの手を引っ張りました。そこに、ひとりの若い女性として的一面を見た思いがして、親近感を覚えたのです。

問八 問三でやったようにつーやんは、雄ちゃんの池跳びを成功させようとしているので、イはちがいます。

三 出典は鈴木孝夫『日本語教のすすめ』。

問二 一線①の前に「セーター、郵便ポスト、消防自動舎などを見ては、これは赤い、あれも赤いと言えるようになります」とあるので、「もの」が何であっても、色が赤ければ赤と呼べることをいっています。

問三 マンゴーがとても珍しいものだった時代に、初めてマンゴーを見て関心している人に大きいのかどうかを聞いてみる、というのですから、アが答えです。

問四 9ページの最後の段落に「あらかじめその人の頭に入っているリンゴの平均的標準的な大きさと目前の実物を比較して、その結果、『大きい』とか『小さい』と言っているのです」と書かれています。これとまったく同じ内容の選択肢はイです。

問五 最後の段落に、「知識や経験」が大きく食い違うと、同じもの（リンゴ）を巡って、「それ（リンゴ）が大きいのかそれとも小さいのかで、しばしば意見が食い違ったりけんかにまでなったりすることがある」と書かれています。

問六 問五でみたように、知識や経験のちがいによって、同じものに対するとらえ方が食い違っているものを選びます。「若者言葉」というものを若者はよいと思っているが、そうでない者たちはよいと思っていないので、これが答えになります。

問七 本文は四つの段落から構成されているので、それぞれの段落の働きを確認します。第一段落で色彩名の例を出して、それと対比するかたちで、第二段落で「大きい」「小さい」が簡単ではないという本題について説明しています。第三段落の書き出しが「以上の分析でわかったことは」となっており、結論を出すと同時に、「人々が皆同意する平均的なリンゴの種としての大きさなどといったあるのだろうか」という問題を提起しています。第四段落はその問題を受け、「すべての人に共有される常識が少なくなり、世代間での知識や経験も大きく食い違うのが普通になってきた」ためにそれぞれの人が頭のなかに抱いている種の基準も同じでなく、しかもそのことを双方がはっきりと意識していないことで問題が起きている、というように意見を発展させています。